【修士論文研究ノート】

スタンリー・カヴェルにおける他人の心をめぐる懐疑論

河村　雄輝

序
第一章　カヴェルによる他人の心についての知識の分析
　第一節　「知る」とは何か――ウィトゲンシュタインの「基準」概念についてのカヴェルの解釈
　第二節　カヴェルにおける「承認」（acknowledgement）
第二章　カヴェルにおける他人の心についての懐疑論
　第一節　私的言語論の意義――『理性の要求』第四部におけるカヴェルのウィトゲンシュタイン解釈
　第二節　他人の心についての懐疑論を生きるということはいかなることか――承認と忌避のはざまで
結

スタンリー・カヴェルは他人の心の懐疑論について明らかに特異な主張を行っている。それは他人の心についての懐疑論は生きられるものだという主張である。本論文の目的は、カヴェルの『理性の要求』（*The Claim of Reason*）における叙述を基に、彼の他人の心の知識をめぐる懐疑論についての考察をたどりながら、この主張の内実を明らかにすることである。

本論文第一章では、ウィトゲンシュタインの「基準」という概念についてのカヴェルの解釈を参照しつつ、彼が他人の心についての知識という概念をどのように分析しているか明らかにした。第一節ではまず、ウィトゲンシュタインの基準という概念についてのカヴェルの解釈を確認した。カヴェルはウィトゲンシュタインの基準概念がどのようなものであるかということについて、日常的な意味での基準との相違点を留意しつつ次のことを指摘する。ウィトゲンシュタイン的基準は、あるものの特徴の記述、すなわちあるもののアイデンティティ（identity）の特定のために用いられるものである。またこの特定は、私たちが日常的に、あるいは実践的にそのものに対してど

のように接しているかということを私たちに思い起こさせる。そしてこのウィトゲンシュタイン的基準は、「確証性」（certainty）というような考えに訴えないものの、われわれ人間が判断を形成する基礎となるようなものなのである。第二節では、ウィトゲンシュタイン的基準の特徴についてのカヴェルの考察を踏まえて、カヴェルによる他人の心の知識についての分析を明らかにした。彼によれば、他人の心とは知られるべきではなく、「承認」（acknowledge）されるべきものである。カヴェルによるこの他人の心の承認という概念は次のように説明することができる。第一節の考察を踏まえると、私たちがどのような他人の心の知識を持つかということは、他人の状態に対してどのような基準を適用するかということを抜きにして考えることはできない。それゆえ私たちは他人の心を知る際に、それに対してどのような基準を適用するか、またそれに伴ってどのような態度をとるかということをあらわにせざるを得ない。そしてカヴェルによれば、他人の心が承認されるということは、私たちが他人を人間として扱うことであり、それゆえ他人の心の知識とは、私たちがどのように他人に対して接しているかという観点から考察されるべきものなのである。

第二章では、前章での考察を踏まえ、カヴェルによる「他人の心の懐疑論を生きる」という概念を以下のように明らかにした。第一節においては、他人の心についての知識に対し、懐疑的な問いがなぜ生まれるかということについてのカヴェルの解釈を参照した。この問題についてカヴェルは、ウィトゲンシュタインにおける基準の概念と私的言語論とのかかわりという観点から考察している。カヴェルによれば、ウィトゲンシュタインによる私的言語論は、他者による理解可能性、あるいは自らの表現不能性に対するある種の人間的かつ根源的な恐怖を表現している。そしてまたカヴェルの指摘によれば、私的言語という空想に身をゆだねることと、他者を自らと内面的生活、あるいは心を共有するものとして理解しないことは同義の行為である。それゆえ、私たちが他人の心の存在について、あるいは理解可能性に問いを呈する瞬間は、自他の心の間に楔を打ち込む瞬間なのである。第二節では、上記の考察を踏まえ、なぜ私が自らを他の人々と内面的生活を共有すると考えなければならないか、すなわちなぜ私は自他を同じ人間としてみなさなくてはならないかという問題についてのカヴェルの議論を明らかにした。先んじて言えば、この問題に対する解決策、あるいはこの問題に答えうる唯一の回答こそがカヴェルの言う「他人の心についての懐疑論を生きる」ということである。カヴェルは他人を人間としてみなす際に私たちが直面する二つの状況を指摘する。一つ目は「他者への曝され」という概念であり、これはいたる

ところで私たちが、他人の心を確実には知りえないながらも、相手を人間としてみなせる機会を有しているということを描写している。二つ目は「私の他者の概念への曝され」という概念であり、これは他人に対してふるまう際に、私が適切にふるまうべき指標を何物も呈してくれないということを表現している。この二つの概念は、私たちが他人の心を、あるいは人間としての他者を承認する営みには終わりがないということを示す。しかしながら一方で、この問題は確実性という概念によって解決されることはない。すなわち、他人を人間とみなすということにおいて究極的な根拠はないのである。カヴェルがこの根拠の不在に関して指摘しているのは、懐疑を前にして承認という営みを止めるということが、私が人間であるということをあきらめるということを意味するということである。それゆえカヴェルは他人を、あるいは自分を人間としてみなすための根拠として一つの飛躍を提示している。それはこの懐疑のもとで人間を人間としてみなし続ける、すなわち他人の心についての懐疑論それ自体を生きるということである。この決断は、私が人間として生きるということであり、人間として生まれたということを受け入れるということである。この決断にはなんら論理的な妥当性はなく、それゆえこれは各人間がおのれ自身においてのみ見いだせるような可能性である。しかしながらこれは他方である整合性を持っている。それは私がこのようにして人間として生まれ落ちたことを無視しないということである。カヴェルが見出したこのような生き方は、逃げることなく、悲劇を生きる人間の姿である。

（かわむら・ゆうき　筑波大学大学院人文社会科学研究科在学）